シリーズ「国土教育」

「自然災害伝承碑」を地図で発信

国土地理院は、国土交通省に設置された測量行政を行う機関で、日本国内の基本図である「地形図」の発行元です。同院はこのほど、過去に起きた津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害の情報を伝える石碑やモニュメント（自然災害伝承碑）の情報を、ウェブ地図「地理院地図」に掲載する取り組みをスタートさせました。今後、防災教育をはじめさまざまな用途での活用が期待されます。

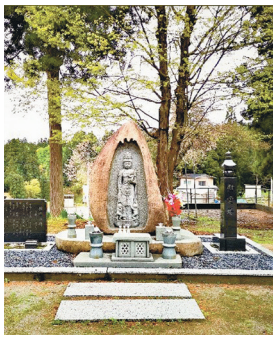
御嶽山噴火災害犠牲者慰霊碑（長野県王滝村）。平成26(2014)年9月27日、御嶽山が噴火。人知を超えた自然の容赦ない猛威により登山者らが巻き込まれ、58名の尊い命が奪われ、5名の足取り途絶え生還叶わぬ、火山史上希にみる噴火災害となった

先人が伝える災害の教訓

国土地理院は取り組みの目的などを次のように述べています。（ホームページより）

我が国は、その位置、地形、地質、気象などの自然的条件から、昔から数多くの自然災害に見舞われてきました。そして被害を受けるたびに、わたしたちの先人はそのときの様子や教訓を石碑やモニュメントに刻み、後世の私たちに遺してくれました。

その一方、2018年7月の西日本豪雨災害で多くの犠牲者を出した地区では、100年以上前に起きた水害を伝える石碑があったものの「石碑があるのは知っていたが関心を持って碑文を読んでいなかった。水害について深く考えた事は無かった」（平成30年8月17日付中国新聞）という住民の声が聞かれるなど、自然災害伝承碑に遺された過去からの貴重なメッセージが十分に生かされているとは言えません。



新潟県中越地震慰霊の碑（小千谷市）。平成16年（2004）10月23日夕刻に中越大地震が発生し、空前絶後の災禍となった。一瞬にして山容は激変し、農地・道路・水源・電気通信等あらゆる生活基盤が破壊される中、家屋全壊で児童3名の命が奪われた

これを踏まえ国土地理院では、災害教訓の伝承に関する地図・測量分野からの貢献として、自然災害伝承碑の情報を地形図等に掲載することにより、過去の自然災害の教訓を地域の方々に適切にお伝えするとともに、教訓を踏まえた的確な防災行動による被害の軽減を目指します。

脆弱な国土で暮らす日本人 各地に残る自然災害伝承碑

日本人は地震、津波、火山噴火、洪水、土砂崩れなどの自然災害が頻発する脆弱な国土の上で暮らしています。別表のように平成23年の東日本大震災以降だけを見ても、近年は大規模自然災害が頻発していることが分かります。

東日本大震災による津波被害は記憶に新しいところですが、東北地方は過去何度も大津波に襲われ、悲劇を忘れず後世に伝えたいとの願いを込めて、各地に建てられた「津波記念碑」が多数残されています。これらの碑が語り伝える先人たちの想いは、本紙も第39～49号にかけて『碑の記憶』として連載してきました。

平成28年熊本地震の際、私が勤務していた熊本県内にも数多くの津波記念碑や供養塔が残されていました。その多くは後に『島原大変肥後迷惑』として語り継がれることとなった大災害に起因するものですが、今から230年近く前の1792年、雲仙普賢岳の火山活動で前山（眉山）が崩壊、これにより引き起こされた大津波が肥前・肥後の有明海沿岸の村々を襲い、日本の火山災害の歴史上最大の死者を出した（およそ1万5000人が亡くなった）大災害として記憶されています。

近年の主な大規模自然災害

発生年月	災害
平成23年3月	東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）
平成23年8～9月	台風第12号（紀伊半島豪雨）
平成24年7月	九州北部豪雨
平成26年8月	豪雨（広島市の大規模土砂災害）
平成26年9月	御嶽山噴火
平成27年9月	関東・東北豪雨（鬼怒川の堤防決壊）
平成28年4月	熊本地震
平成29年7月	九州北部豪雨
平成30年7月	西日本豪雨

国土地理院、学習教材「地図」に新たな1ページ

地理院地図における「自然災害伝承碑」表示イメージ

「地図」を活用した防災教育の一環

道路地図、住宅地図、都市計画図、鉄道路線図、バス路線図、観光案内図、天気予報図、植生図、ハザードマップ、グーグルマップ……など、私たちは沢山の地図に囲まれて暮らしています。地図は私たちの生活に欠かせないもので、学校教育の「地理」の学習単元には、必ず地図学習が含まれています。

今回の国土地理院の取り組みは、新しく「自然災害伝承碑」の地図記号をつくり、地理院地図に掲載することで、自然災害伝承碑を周知し、地域住民の方に地域ごとに発生しやすい自然災害を現実のものとして感じてもらうことを目的としたものです。この碑をきっかけに、過去の教訓を踏まえた的確な防災行動による被害の軽減を目指しています。また、身近な災害履歴を学ぶための学習教材として、学校における防災教育等での活用が期待されます。

先人たちが現代に伝える災害の教訓を正しく知ることが、災害への「備え」を充実させ、災害による被害の軽減に貢献すると期待します。

（国土学アナリスト　森田康夫）

道の駅 点描

国道愛好家

松波成行

初めて訪れる街や場所の風景は、その土地に住む人には「当たり前」の風景でも、日常とは違う風景を切り出せると「旅」の気分になります。移動が「自転車」だとその感が一層高まります。

レンタサイクルのサービスは貸し出し場所への返却が固定されるものでしたが、最近は海外で人気のある自転車による観光「サイクルツーリズム」の影響もあり、日本でも自治体を跨いで広域観光が楽しめる仕組みができつつあります。指定場所ならどこでも自転車の貸出・返却ができ、気軽に借りられ、予定やルート変更が生じても柔軟に返却できるようになり利便性が高まりました。

貸りられる自転車も長距離走行が可能なロードバイクも取り揃えられるようになりました。ロードバイクなら1日に100キロメートル以上の移動も可能で、海外からの本格派サイクリストも呼び込めます。このようなことから、新たな自転車のための観光道路として、主要な観光地を連絡する延長100キロ超のロングライドルートの「ナショナルサイクルルート」が、この夏にも国土交通省で定められます。

「ナショナルサイクルルート」では、中継地点（休憩地点）となる「道の駅」も重要な役割を担うでしょう。道の駅を訪れる手段は車に限られていたものが、今後は自転車という古くて新しい移動手段によって、賑わいを見せるようになることも見込まれます。